



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.hoyukai.org/>

第185号

発行:2021年9月15日

発行責任者:

特定医療法人社団 鵬友会



経験は財産

横浜ほうゆう病院 事務次長 相澤 裕

私は今年1月、事務次長として横浜ほうゆう病院に異動しました相澤です。早いもので真冬に異動してから春が過ぎ暑い夏を経て初秋を迎え8ヶ月が経ちます。今回この鵬友会ニュースレターを書くに当たりこの8ヶ月を振り返りました。改めて振り返ると一つ一つの経験から多くの学びがあったことに気づかされます。ここでは経験からの学びをレポートし、私、相澤裕という人間を知っていただき、身近な存在に感じて頂ければと思います。

異動当初、これまでとは物理的・人的環境が全く異なる中で自分は事務次長としてどのように立ち振る舞い、行動すればよいのか苦悩する毎日でした。この時は孤独感すら抱いた事を今でも鮮明に覚えています。このような中、前沢事務部長をはじめ横浜ほうゆう病院の全職員が笑顔で声を掛け、物事一つ一つ丁寧に対応してくれました。横浜ほうゆう病院全職員の気遣いが私の苦悩を和らげ今の私があると思っています。こんな言葉があります『かけた情けは水に流せ受けた恩は石に刻め』横浜ほうゆう病院全職員の気遣いある対応は正しく『石に刻む』ことと受け止めております。

異動して7か月が経過した時です。ご存知とは思いますが当院は新型コロナの集団感染が発生しました。当院は認知症専門病院であり、感染対策一つとっても一般病院とはまた違った難しさがあります。クラスター発生時は、事務手続きや物品の発注・管理、環境整備等の対応など事務職員といえ、業務は多岐にわたりました。病院全体が一瞬にして張り詰めた空気になりましたが、職員一人一人が各々の立場で的確に役割を把握し速やかに対応できた部分もありました。また、直接患者ケアに携わる看護・

介護職員を支えるには何が必要で何ができるかを考え事務職員一丸となって行動に移しました。また、湘南泉病院の藤田事務部長をはじめ多くの方々のご協力もあり最も大変な時期を乗り越える事ができました。

クラスター発生は決して良い事ではありません。しかし、この難題を通して全職員が同じ目的・目標に向かって取り組むことは組織全体を強くするという事を実感しました。病院、法人の理念・目標を達成させるのもこれと同じ事だと考えます。そして、誰もが同じ方向に活動できるように先頭に立って道を作っていくのが事務次長の役割でもあると考えます。

人事異動そしてクラスター対応の経験を通して、『人』の持つ力は組織にとっても最大の財産だと改めて感じました。人的コストは経営そのものにも直結するのではないのでしょうか。だからこそ多くの管理業務がある中で私は人材(財)管理を重視していきたいと考えます。事務次長として個人の持つ力を最大限に発揮させるには、伝える力を高める必要があると思います。時として管理者は厳しい事を言わなければいけません。厳しい言葉も口調一つで相手の受け止め方が全く異なります。自分の言葉が相手の行動にどう影響するのかを考え言葉を選び伝える事が結果的に良い力を最大限に発揮させ組織そのものを強くすると考えます。

私自身、経営や労務などまだまだ多くの事を学び経験していく必要がありますが、これからも横浜ほうゆう病院そして法人の一員として努力を重ねてまいります。法人の皆様引き続きご指導を宜しくお願い申し上げます。

マスクやフェイスシールドの効果



新型コロナウイルスの感染拡大によって今やマスクは生活に欠かせない存在になりました。そんなマスクも不織布マスク・布マスク・ウレタンマスクと種類はさまざまですが、どれだけの効果があるのかは、感染拡大当初にはわかっていませんでした。現在、理化学研究所のスーパーコンピューター「富岳」により、それぞれのマスクのシミュレーション（計算）が行われ、その効果が解明されています。

■ マスクやフェイスシールドの効果 (スーパーコンピューター「富岳」によるシミュレーション結果)

対策方法	なし	マスク			フェイスシールド	マウスシールド	
	吐き出し飛沫量	100%	20%	18-34%	50% ^{※2}	80%	90% ^{※2}
	吸い込み飛沫量	100%	30%	55-65 ^{※2}	60-70% ^{※2}	小さな飛沫に対しては効果なし (エアロゾルは防げない)	

※2 豊橋技術科学大学による実験値

● 実験 (マスクは厚生労働省が示す正しい着用方法にもとづいています。)

さまざまな素材のマスクを着用した人頭モデルにミスト生成装置を接続し、飛沫の飛散状況をレーザー光を用いて可視化、カウントしました。吸い込み時の計測は実際に人がマスクを着用。飛沫の直径は、0.3 μ m(小さな飛沫)から200 μ m(大きな飛沫)まで計算しています。

● 結果

吐き出し: 飛沫量は不織布、布ともに8割が捕集されます。

吸い込み: 不織布マスク着用時、マスクと顔に隙間がある場合でも上気道(鼻から鼻腔、鼻咽腔、咽頭、喉頭)への吸引飛沫量を1/3にすることができます。フェイスシールドにおいては、大きな飛沫(50 μ m以上の水滴)については捕集効果が見込めるが、エアロゾルはほぼ漏れてしまう。

結果、N95マスクは医療用のため、ここには出てきておりませんが、一般的に使用されているマスクの効果は、不織布マスクが吐き出し飛沫量80%カット、吸い込み飛沫量70%カットで、一番効果が高いことがわかります。日常的に不織布マスクをしていると、息苦しさや圧迫感を訴える人もいますが、それは不織布マスクのフィルター性能が高いからです。息がしやすいと飛沫防止効果では劣ってしまうのはある意味当然と言えます。

次にフェイスシールドやマウスシールドですが、マスクなしの単体だと効果が低いことがわかります。ただし、**マスク+フェイスシールド**の併用にすれば、より効果が得られます。併用することで吸引する粒子の移動速度の低下が顕著になることもわかっています。

当法人では、患者・利用者様と接するときは、サージカルマスク（不織布）とフェイスシールドを併用することに全施設統一しております。